謎の美食家

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎の美食家

【Ｎコード】

Ｎ２２４４Ｓ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ベルリンのごく普通のレストラン。そこによく来る厳しい大柄な老人は何者なのか。あの歴史上の人物を書いてみました。実際に桁外れの大食漢でハンバーグが大好きだったとのことです。

第一章

謎の美食家

ベルリンのあるレストランでだ。店の店員達の間で話題になっていることがあった。

「また来ているな」

「そうだな、あのお客さん」

「今日も来てそれで」

「ビールにソーセージ」

メニューについても述べられていく。

「それにザワークラフトにアイスバインな」

「ハンバーグも頼むしな」

「とにかく滅茶苦茶食べるな」

「全くだよ」

彼等はこう話していくのだった。この店はレストランといっても所謂市井の平民達が出入りするありふれた店だ。店の中には労働者や小売業者で溢れている。

その中にだ。いつも異様に厳しい顔、口髭が目立ち頭の禿げた男が来るのだ。背は高く太ってさえいる。その厳しい顔には向こう傷まである。

その傷を見てだ。店員の一人が言った。

「軍人じゃないのか、あの人」

「ああ、あの傷な」

「只の傷じゃないな」

「それは間違いないな」

この言葉に誰もが頷く。

「戦場で受けた傷か？」

「じゃああの人軍人か」

「そういえば姿勢がいいしな」

背筋はぴんと立っていた。次にこのことが話されるのだった。
「それに仕草もきびきびとしているしな」
「気品もあるしな」
「そうそう、気品だよ」
「それかなりあるよな」
このことも話される。
「この店には不釣合いな感じでな」
「ああ。掃き溜めに何とやらだな」
「そんな人だよな」
「服装は普通だけれどな」
一応そちらはごく普通の労働者のそれであるのだ。とはいっても異様なまでの長身と立派な体格が目立つ。それはどうしようもなかった。
「この前絡んできた若い奴と喧嘩してぼこぼこにしてたぜ」
「喧嘩相当強いな」
「けれどその喧嘩の仕方もな」
店の前でやっていたその喧嘩についても話される。
「ボクシングだったな」
「ボクシングか」
「ああ、それだったよ」
こうした場所で普通の格闘技を使う者は少ない。ただの喧嘩が普通だ。しかしその客はボクシングを使ったのである。それもまた、であった。
「それにここに住んでる人かね」
「ううん、あんな目立つ人いたらすぐにわかるけれど」
「けれどいないしな」
「ああ、いないな」
住む場所もわからないのだった。おまけにだった。
食べる量もだ。尋常なものではなかった。それも驚くべきものだった。

「ハンバーグ何枚もだしな」
「ザワークラフトもソーセージも山盛り」
「ビールはそれこそ樽ごと」
そこまで飲み食いするのであった。その客は。
「卵好きだしな」
「ゆで卵一ダース食べるてたしな」
「食べるよなあ、本当に」
「身体が大きいのもあるだろうな」
その大柄さもまた話される。
「一体どんな人なんだろうな、あの人」
「どう見ても普通の人じゃないよ」
「けれどこの店の料理は気に入ってくれてるな」
「だからいつもこの店に来てくれるんだな」
「それは間違いないな」
わかっていることはだ。このことだけだった。
「美味いって言ってくれるしな」
「それに金払いもいいしな」
「しかもチップまで出してくれるよ」
こうした場所の店はないことだった。そうしたことは貴族の世界だけである。平民、しかも猥雑な労働者や小売業者の間ではだ。そうしたことはないのだった。
それでだった。このことが余計に店の者達が客について考えさせるのだった。とにかくだった。その客は不思議な客であった。
しかしやはり来る。そうしてであった。
「今日はだ」
「はい、何を頼まれますか」
「ソーセージだな」
まずはそれだというのだ。

第二章

「それとハム、後は」
「後は？」
「キャベツを煮たものがあるな」
野菜もだった。
「キャベツと人参、それに蕪を煮たもの。これをくれ」
「わかりました」
「それとジャガイモとベーコンをバターで炒めたものだ」
それもだった。
「ビールは黒だ」
「黒ビールですか」
「まずはこれだけだ。ソーセージとハムは四皿ずつだ」
その数も告げてであった。客は店の端の席に陣取り次々と食べていく。何時しか彼の周りに他の客達も来てだ。賑やかに飲み食いするのであった。
「やあ、あんたまた来たな」
「食ってるねえ、相変わらず」
「凄い量だね」
「人間とはだ」
その客は厳しい声で、だが饒舌に話すのだった。
「食べることだ。だからわしもだ」
「食うってのかい」
「その山みたいな量のソーセージにキャベツ」
「ビールも」
「そうだ。食べて飲む」
言葉が断言になっていた。
「そうするのだ」
「いいねえ。それじゃだよ」

「こっちもな」
「そうさせてもらうか」
「一緒でいいかい？」
労働者達は笑顔で彼に問う。
「席一緒で」
「椅子こっちに持って来てもいいか？」
「食い物とビールもな」
「一緒にやるかい？」
「勿論だ」
にこりともしないが確かに言う彼だった。
「それではな」
「ああ、それじゃあな」
「楽しくやろうぜ」
「思う存分な」
こうしてだった。彼は労働者達とも楽しく飲み食いをするのだった。それが彼だった。
彼はよくここに来てだった。とにかく飲み食いをした。その彼を見てだ。
おかみがだ。こんなことを言うのだった。
「何かあのお客さんってね」
「んっ、何だ？」
「何かあったのか？」
「前からちょっと思ってたけれど」
それでもだというのだった。それはだ。
「どっかで見た気がするんだよ」
「どっかで？」
「っていうと何処で」
「いや、何処かはわからないよ」
おかみはそれはわからないという。しかしだった。こうも話すのだった。

「よく見る顔なんだけれどね」
「よく見る、かい」
「あの怖い顔のおっさんがか」
「そうなんだ」
「そうじゃないかい？見覚えないかい？あの顔に」
おかみの今の言葉を聞いてだ。店の者達も話すのだった。
「そういえばそうかな」
「何処かで見たような」
「それも何度も」
「そうだよな」
「目立つ顔だよな」
誰がどう見てもだった。その顔はあまりにも厳しくだ。そのうえ向こう傷まである。その大柄な身体もあってだ。とにかく目立つ人物である。
それを踏まえてだ。彼等はさらに考えていくのだった。
「一体誰なんだろうな」
「そうだよな。何処かで見た気がするし」
「誰なのか。気になってきたな」
「全くだよ」
彼等は謎の客について誰なのか真剣に考えだした。そんな中でだ。

第三章

店の親父が新聞を買って来た。実はこの店の人間は客も含めてあまり新聞を読まない。理由は簡単で字を読める人間がいないからだ。しかし彼は新聞を買って来た。おかみはいぶかしみながら亭主に尋ねた。

「また何で新聞なんか買ってきたんだい？」

「ああ、実はな」

「実は？」

「寒くてな」

だからだとだ。笑って話す彼だった。

「それでだよ」

「寒くて新聞を買うのかい。わからない趣味だね」

「実はな。新聞はな」

「焼いてそれで暖を取るってのかい？」

「ああ、違う違う」

それは否定する亭主だった。笑いながらだ。

「そうじゃなくてな」

「じゃあ何で買ったんだい」

「これを服の中に入れるんだよ」

実際にだ。彼は新聞紙を上着の中に入れてみせた。そのうえでまた話すのだった。

「そうすればあったかいんだよ」

「そうだったのかい」

「ああそうだよ。それでなんだ」

「面白いね。字を読めなくても新聞って役に立つんだね」

「そうだな。じゃあ店の用意するか」

「そうだね」

二人が率先して店を開ける準備をはじめる。新聞は店のカウンタ

ーの端に置いた。店の者達も来てその都度準備に加わりだ。開店準備をはじめた。
客達も入る。やはりあの客も来た。彼はいつもの席に座ってだ。やはり山の様な料理を平らげていく。ここまではいつも通りだった。
しかし客の一人がだ。カウンターの端に来た。そしてであった。
「おや、珍しいな」
「珍しいって？」
「何かあったのかよ」
「いや、新聞があるな」
その客は新聞に気付いたのである。
「この店に新聞があるなんてね」
「ああ、その新聞な」
亭主が笑いながらその客に話す。
「実は俺がな」
「おやっさんが？」
「服の中に入れてあったまったんだよ」
このことを客にも話すのだった。
「それでだよ」
「それでか」
「ああ、そうなんだよ」
笑いながらの言葉だった。
「それでなんだよ」
「成程ね。生活の知恵ってやつだな」
「そういうことだな。まあまた暖に使うか」
「いや、ちょっとその前にな」
ここでだ。客はこう言ってきたのだった。
「この新聞読ませてくれるか？」
「おや、あんた新聞読めるのかい」
「少しな」
そうだとだ。亭主に話すのだった。

「読めるんだよ」
「そうだったのか」
「少しだけだけれどな。じゃあ読んでいいか？」
「ああ、好きにしな」
親父はそれは一行に構わないとした。そうして客がそれを読むことを許したのだった。

第四章

客は実際にカウンターに座り新聞を読んでいく。するとだ。
新聞の写真にだ。あの顔があった。
「んっ！？この顔は」
その写真を見てすぐに店の端に顔をやる。すると。
そこに同じ顔があった。全く同じ顔だ。ただ写真の方は白い軍服で店にいるのは労働者の服だ。違うのは服装だけである。
客はそれを見ていぶかしむ。どうして新聞にあの謎の客がいるのかとだ。
「何だ？あの爺さん有名人か？」
この店の者達も字は読めなくても新聞がどういうものかはわかっている。だからこその言葉だった。
「ひょっとして」
いぶかしみながら字を何とか読んでみる。するとだ。
首相だのそんな言葉があった。しかも写真の下にもだ。首相と書いてあった。しかもその名前までもがだ。丁寧に書いてあったのであった。
「ってことはだ」
客はだ。ここでわかったのだ。謎の客の正体が。
思わず声をあげそうになった。しかしであった。
「黙っていることだ」
何時の間にかだ。その謎の客が彼のところに来てだ。こう告げてきたのである。
「わしのことはだ」
「けれどあんたここに」
「だから黙っていることだ」
男の声が実にドスが効いている。明らかに効かしてきていた。
「いいな」

「わかったよ。それじゃあ」
「言わなくていい時は黙っている」
これがその男の言葉だった。
「うまくやるコツだ」
「コツなのかい」
「それを言っておこう」
「それはわかったんだけれどな」
若い客はいぶかしむながらその客にこう返した。
「けれどな」
「けれど。今度は何だ」
「またどうしてなんだい？」
その客に怪訝な顔で問う。
「こんなしがない店に来て。あんただったらもっと立派なものをたらふく食えるだろうに」
「料理は違う」
「違うって？」
「美味いものはそこに何があるかだ」
それだとだ。謎の客は話すのであった。
「何かがだ」
「何かって何がだよ」
「その作る人間の心だな。それに雰囲気だ」
「その二つかい」
「この見せには両方ある」
その心と雰囲気がだというのだ。
「だからいい」
「そういうことかい」
「そういうことだ。これからもここに来るからな」
これは確かだというのである。
「では。わしのことはくれぐれもだ」
「わかったよ。言わないよ」

「言わなければいい。では楽しくやるか」
「ああ、そうするか」
若い客も彼の言葉に笑って応えた。そうして共にビールに質素だが心のある御馳走、それに賑やかな雰囲気を楽しむのであった。
歴史書にはこうある。プロイセン、ドイツ帝国の首相であるビスマルクはかなりの大食漢であったと。牡蠣を百個以上、ゆで卵を十個以上食べたことがありハンバーグが大好物だったという。そして美味ならばどんな国の、それこそドイツの宿敵フランスの酒であるシャンパンも愛していたという。その彼にまつわる話は色々とある。この話もそれであると言われているが真実はわからない。だがベルリンの下町には今もこの話が残っている。

謎の美食家　　完

２０１０・１２・２４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2244s/

謎の美食家

2011年4月4日22時40分発行